

まぼろしの邪馬台国

2008(平成20)年10月20日鑑賞(東映試写室)

★★★★★



監督＝堤幸彦／原案＝宮崎康平『新装版 まぼろしの邪馬台国』(講談社文庫刊)／出演＝吉永小百合／竹中直人／窪塚洋介／風間トオル／平田満／綾小路きみまろ／不破万作／大仁田厚／石橋蓮司／ベンガル／江守徹／柳原可奈子／黒谷友香／麻生祐未／岡本信人／大杉漣／余貴美子／由紀さおり(東映配給／2008年日本映画／118分)

第2章

新旧半々のラインナップ

……吉永小百合113本目は「怪演男」竹中直人と共演！ 邪馬台国は島原にあった。盲目の奇才宮崎康平は、それを根拠づけるため現地を踏破！ その目となり、康平と共に卑弥呼と邪馬台国を「目撃」したのが、吉永小百合演ずる和子だ。古代ロマンの香りと、極限状態まで昇華した夫婦愛の感動的な姿をじっくりと味わいたい。ちなみに、これを機会にスカパー！の「吉永小百合祭り」全32作はもちろん、過去112作すべての鑑賞に挑戦してみては……。



『祭り TV！ 吉永小百合祭り』開催！

スカパー！の『祭り TV！ 吉永小百合祭り』が企画されたのは、08年11月1日からの『まぼろしの邪馬台国』の公開を記念したもの。吉永小百合は1959年の『朝を呼ぶ口笛』から08年の『まぼろしの邪馬台国』まで計113本(ただし、ナレーション出演だけの『蓮如物語』(98年)と『あした元氣にな～れ！ 半分のさつまいも』(05年)は除く)に出演しているが、『吉永小百合祭り』では『キューボラのある街』(62年)や『愛と死をみつめて』(64年)をはじめとする全32作品が一挙放映される。

浜田光夫氏と共にゲスト出演した私は、「卑弥呼」という名前のお菓子から「邪馬台国」を連想し、さらに「邪馬台国」といえば『まぼろしの邪馬台国』を連想するところから、『まぼろしの邪馬台国』略して『まぼたい』の見どころを解説。そして、女優吉永小百合の魅力とその作品をいろいろな角度から語り合った。是非この企画は成功してもらいたいものだ。

あなたは宮崎康平と和子を知ってる？

「邪馬台国」や「卑弥呼」という言葉は日本人なら誰でも知っているが、①島原に宮崎康平という人物がいたこと、②彼が妻和子の協力を得て書いた『まぼろしの邪馬台国』が1967年に第1回吉川英治文化賞を受賞したこと、は多くの日本人が知らないはず。また、①宮崎康平が島原鉄道の近代化につとめる中、昭和23年に失明したこと、②妻が夫と子供たちを見捨てて逃げて行った後、彼が作詞・作曲したのが『島原の子守唄』であること、③1957年に島原を襲った大水害の復旧現場の中で、土器が数多く出土したこと、邪馬台国の研究に活躍し始めたこと、などは私を含めてほとんどの人が知らないのでは……？

ましてや、①宮崎康平の妻となった和子は、もともとNHK福岡放送に勤めていた時に宮崎康平と出会い、島原観光バスのバスガイド指導員として招かれ、康平が島原鉄道の代表取締役を解任される中、事実上の結婚生活に入ったこと、②邪馬台国を探し求める旅が始まる中、和子が康平の目となって康平に協力したこと、は多くの日本人は知らないはず。

『まぼろしの邪馬台国』がそんなすごい人物を描いた映画だったとは、私も『祭りTV！吉永小百合祭り』へのゲスト出演が決まったことによって、しっかり勉強するまでは全然知らなかった。吉永小百合は『ALWAYS 三丁目の夕日』が日本アカデミー賞13部門中12部門を独占した2005年に、『北の零年』で最優秀主演女優賞を受賞したが、今回の『まぼろしの邪馬台国』は、どうも『北の零年』以上のすごい映画。私はそんな期待を……。

『レッドクリフ』と共に！

『まぼろしの邪馬台国』と同じ08年11月1日に公開されるのが、製作費100億円というジョン・ウー呉宇森監督の『レッドクリフ』(08年)。これは、『三国志』の中の有名な「赤壁の戦い」を描く超大作だが、その時代は、後漢王朝も末に近づいていた西暦208年。荊州方面での「ちょうはん長坂の戦い」で劉備軍を破り、続いて呉の国内まで攻め下った曹操軍80万は、劉備と孫権の連合軍5万に「赤壁の戦い」で大敗するわけだが、その戦略と戦法を担ったのが呉の孫権から司令官と指名された周瑜と劉備の軍師諸葛孔明。その後諸葛孔明が唱えた大構想「天下三分の計」どおり、中国は魏・呉・蜀の三国鼎立時

代を迎えることになる。しかし、まず国力の弱い蜀が減び、次いで呉も滅ぼされ、天下は魏が統一することに。

そんな三国鼎立時代から魏の時代に移行する中で3世紀末（280～290年）に書かれたのが『魏志倭人伝』。『魏志倭人伝』には、狗邪韓国^{くやかんこく}、対馬国^{つまこく}、末盧国^{まつろこく}、伊都国^{いとこく}、奴国^{なこく}、不弥国^{ふみこく}などの国名がたくさん記されているうえ、女王の都のある邪馬台国^{やまたいこく}に至る道筋が記されている。今まで『魏志倭人伝』など縁遠かった人も、『レッドクリフ』とセットで勉強すれば少し身近になるのでは……？

良くも悪くも、宮崎康平役は竹中直人でなくっちゃ

竹中直人は日本映画を代表する個性派俳優（ケツタイな俳優？）だから、あの映画、この映画で「怪演」と称される演技をたくさん見せてくれる稀有な個性の持ち主。プレスシートによれば、大正6（1917）年に長崎県島原市で生まれた宮崎康平は、昭和15（1940）年に早稲田大学文学部を卒業したが、学生時代には森繁久彌らと共に学生演劇をやり、卒業後は東宝に入社したとのこと。この映画における宮崎康平の葬儀では、森繁久彌の名前が書かれた櫓^{しきぎ}がやけに目立つのはそのせい……？ ところが、実兄の病死によって彼は島原に戻り、昭和21年に島原鉄道に入ったところから、彼の破天荒な人生が始まった（花開いた？）ようだ。

彼はなぜ盲目になったの？ それは映画の中では説明されないが、プレスシートによると、島原鉄道の近代化につとめる中での過度の疲労から昭和23年に失明したらしいから、仕事への集中ぶりが並大抵でなかったことが推測できる。映画は島原鉄道の代表取締役である宮崎康平のワンマンぶりを描き出すが、そんな演技は良くも悪くも竹中直人の独壇場。目をむいた表情、大声でどなる声、そして明らかなオーバーアクションながらなぜか説得力をもった「怪演」。これらが俳優竹中直人の魅力だが、そんな竹中直人が宮崎康平役によって水を得た魚のようにイキイキと。やはり、宮崎康平役は竹中直人でなくっちゃ……。

和子はよくもまあ、こんな決断を！

そんな破天荒な男宮崎康平だから、康平と和子との接点も面白いものばかり。2人の最初の出会いは昭和31年。NHK 福岡のアナウンサーをしていた和子がゲストとして康平を迎えたため。どうも、康平は盲目になっても美人の顔を見分け、美人の声を

聞き分けることができたようで、康平はこの時点から和子にゾッコン。ちなみに、康平の招待に応じて和子が島原を訪れた時は、匂いですぐに和子とわかったようだから、康平は匂いでも美人の匂いを嗅ぎ分けることができたようだ。

そんな康平の和子に対するプロポーズは強引かつユニークなもの。このシーンはTVコマーシャルでも流されているが、よくもまあ和子はこんなセリフに乗って、康平と2人の子供たちの世話をするという決断をしたものだ。もっとも、その後の卵投げシーンを含む夫婦ゲンカの姿を見ていると、やっぱり2人は似た者同士……？ 立体地図を思いついて製作したり、康平の目となって歩き回ったり、和子が康平に尽くした功績は大きいが、きっとこれは義務的なものではなく、それを超えた和子自身の楽しみであり、和子自身の生き方。私はそう理解したが、さてあなたは？



弁護士の論点 その1——社長の解任は？

この映画には弁護士の論点(?)が2つ登場する。第1は、島原鉄道の代表取締役である宮崎康平の解任騒動。映画でみる限り、宮崎康平は「島原鉄道はワシの会社じゃ」と公言してはばからないワンマン社長。したがって、戸田副社長(石橋蓮司)ら役員は大抵のことはそのワンマンぶりに目をつぶっていたが、1957年の大水害の復旧作業の途中で土器を発見したことによって宮崎康平は社長業そっちのけで邪馬台国研究に熱中し始めたから、戸田副社長らが会社の行く末を案じたのは当然。

しかして、その行き着いたところが、取締役会における代表取締役宮崎康平の解任動議の提出とその可決だ。手続的にはこれでオーケーなのだが、弁護士のみにみると、それはこの映画ほど簡単ではない。つまり、代表取締役の解任は取締役会で議決できるが、取締役の解任は株主総会の議決が必要なのだ。しかし、「島原鉄道はワシの会社」と公言しているところを見ると、島原鉄道の株のほとんどは宮崎康平が所有しているはず。そうだとすると、株主総会での宮崎康平の取締役会解任決議の成立は到底ムリ。

この映画ではそんな法的論点は無視されているが、日本が法治国家である以上、そこらあたりは弁護士の論点としてキッチリ整理しておきたいところ。



弁護士の論点 その2——団体交渉は？

敗戦後の新憲法の発布に伴って、労働者は団結権、団体交渉権、団体行動権(争議

権」という労働三権（労働基本権）を獲得することになった。これによって生まれたのが、団結した労働者の組織たる労働組合と、会社の経営者との団体交渉という構図。

この映画には、島原鉄道労働組合委員長として多くの（？）組合員を率いて宮崎康平社長と厳しく対峙する佐々木一馬（窪塚洋介）の姿が登場する。もちろん、労使双方とも真剣勝負なのだが、宮崎康平の対応ぶりを見ているとどこことなくユーモラス……？ 平成20年の今では、労使のガチンコ対決という労働争議の風景は失われたが、この映画ではその一端を垣間見ることができるので、それにも注目。

さらにこの佐々木が、映画の後半バスガイドとなる玉子（柳原可奈子）との間の恋模様を含めつつ、ちょっとしたストーリー形成を担うことになるので、それもお見逃しなく……。

『島原の子守唄』が大切な核に

「逃げた女房にゃ未練はないが、お乳ほしがるこの子が可愛い、子守唄など苦手な俺だが、馬鹿な男の浪花節、一つ聞かそか、ねんころり」。これは一節太郎のヒット曲『浪曲子守唄』だが、スクリーン上に見るある時期の宮崎康平の境遇はこれと全く同じ。

もっとも、『まぼろしの邪馬台国』の舞台は島原だから、そこで歌われるのはもっぱら『島原の子守唄』で、この曲がストーリー構成の大きな核となっている。ところで、この曲の作詞をしたのが宮崎康平だということをあなたは知ってる？

それはともかく、「島原のまちおこし」役として重要な社会的使命を果たし、有明銀行頭取の江阪（江守徹）からも絶大な信頼を得ている宮崎康平も、家庭人としては完全な失格者だったようだ。したがって、妻の朋子（余貴美子）が誠と照子という2人の子供を残したまま家から逃げて行ったのは仕方のないところ。島原観光のバスガイド教育係として島原に居ついていた和子が、なぜそんな康平の事実上の妻として家に入ったのかは微妙なところだが、それがこの映画の見どころ。したがって、その点はじっくりとあなた自身の目で。

弁護士の論点 その3——離婚制度は？

この映画では、宮崎康平が第1回吉川英治文化賞の授賞式のために家族で上京した際、長男の誠がある単独行動をとるシーンが登場する。そして、これがラストの大き

53



「まぼろしの邪馬台国」

梅田ブルク7ほかで公開中

スカパーの「吉永小百合祭り」に集結!

邪馬台国は近畿に? それとも九州に? それを解く鍵は、魏志倭人伝にある。竹中直人独特の過激な演技で挑む宮崎康平は、独自の島原説を唱え第1回吉川英治文化賞を受賞した昭和の奇才。他方、康平の目となり共に現地を踏破した宮崎和子を演ずるのは、これが百十三本目の出演作となる

る吉永小百合。島原鉄道私はそのプロモーションの社長として地方の活性化に情熱を燃やした康平と和子との運命的な出会い、土器の発見を契機とした卑弥呼と邪馬台国探しの狂気などを、古代街(一九六二年)『愛と死をみつめ』(六四年)『細雪』(八三年)『おはん』(八四年)など七作の見どころと小百合を熱く語り合った。

五十九年の銀幕デビューから六九年(十四)二十四歳までで七十八本七五年一〇〇八年で三十五本に出演。六一年には何と十六本も! サユリストなる言葉を生み、団塊世代の圧倒的かつ長期的な支持を受けたのは、彼女の清純、可憐、ひたむきさの魅力のため。『青春の門』(七五年)の汚れ役で大人の女優に変身し、以降年一本ペースで『皇帝のいない八月』(七八年)『動乱』(八〇年)『海峡』(八二年)等に出演。六十歳、百十一本目の

記念作『北の零年』(〇五年)では日本アカデミー賞最優秀主演女優賞を、絶妙の位かせる演技を見せた『母へ』(〇七年)に続く本作では康平の情熱を支える妻和子役を見事に演じ切った。少女時代の魅力が半世紀全く変わらない吉永の魅力を、映画館とテレビでぜひ味わってほしい。

大阪日日新聞 2008(平成20)年11月8日

な泣かせどころの伏線となることに。また、かなりケバイ化粧でスナックのママさん役を演じる余貴美子が、ラストシーンで大きな役割を果たすことになる。

その感動はしっかり映画館で味わってもらいたいが、私が弁護士の思うのは、なぜ康平は朋子とさっさと離婚手続をとり、和子と再婚手続をとらなかったのかということ。私の想像では単に面倒だったということだろうが、それでは和子に対する愛を尽くしたことはないのでは? それが私には大きな疑問だ。そこらあたりは、是非ホンモノの宮崎和子さんに直接お尋ねしたいが……。



あなたも是非、卑弥呼とご対面を

康平の顔についている目は役に立たなくなったが、心臓についているという目は、何から何までお見通しらしい。そのうえ、康平はものすごい努力家だから、和子お手

製の立体地図と『魏志倭人伝』の録音テープを勉強したうえで、愛用の杖を持って現地を踏破すれば、彼の目にはさまざまな姿が見えてくるらしい。もちろんそれには、和子の目とその目から見えた風景を描写する表現力が必要だが、2人の旅する姿を見ていると、ホントに似た者同士のいい夫婦。

この映画の主題歌は、『タイタニック』(97年)で『My Heart Will Go On』を世界的に大ヒットさせたセリーヌ・ディオンが歌っているが、その曲名は『卑弥呼のテーマ A WORLD TO BELIEVE IN～ヒミコ・ファンタジア～』。これだけ熱心に邪馬台国のため、そして卑弥呼のために全精力を傾けてきたのだから、康平の心臓についているという目にはいつかきっと卑弥呼の姿が見えてくるはず。そう思っていると案の定……。

近時『20世紀少年』(08年)という大作に取り組んでいる堤幸彦監督ならではの古代ロマンの香りを味わいながら、是非あなたも康平、和子と共に卑弥呼とご対面を。

2008(平成20)年10月29日記

ミニコラム

なぜ、私がスカパー！に？

『祭りTV！ 吉永小百合祭り』へのゲスト出演が実現したのは、(株)テレパックの菱田プロデューサーと『シネマ18』のおかげ。つまり菱田氏が『シネマ18』の『母べえ』の評論を読んで「是非この人に！」と考えてくれたわけだ。電話での確認事項が面白い。私に対する確認は「先生はサユリストですよね？」。答えはもちろんYES。私は3本立て55円の日活の映画館に通っていた中学生時代、ほとんどの作品を観ていた根っからのサユリストだから。私の質問は「真面目な番組ですよ

ね？」。それは、おふざけが過ぎるバラエティーへの出演はイヤだから。

生まれてはじめてメイクさんに髪の毛と顔をいじってもらった上での収録時間は約2時間半。口は達者だったが、身体が揺れていたのはやはり緊張のせい？ 私の役割は作品の見どころコメントだが、発言を絞るのが大変。司会者は「先生のプレゼン、無茶苦茶上手いですね」と言ってくれたが、さてその出来は？ こんな楽しい経験なら、またいつでもウェルカム！

2009(平成21)年2月13日記